

黒部の三年間

海老原 博

念願の黒部川航行を終えて早や一年以上過ぎてしまった。ここでふり返えると色々な事が思い出される。私の歩んで来た三年間を思いつくまま書き綴ってみたい。

探検部に入部して、ボート班に入ったのは単に激流を下る事は楽しいだろうという安易な気持ちであり、黒部がどうのこうのという事は毛頭考えなかった。一年の内はただ無我夢中でオールの漕ぎ方を練習した。一年生の夏の黒部計画では私はサポート隊員であった。自分が技術的にも精神的にも実力不足であることは分っていたし、サポートの重要性も知ってはいたが、残念だった。その反面「俺はサポートだから危険はない」という様な安堵感に襲われたのも事実であった。

そのような気持ちで黒部出発を待っていた時、一つの問題が起きた。某新聞に「黒部川下りは暴挙である云々」というような記事が載せられ、又警察からも中止勧告が出されたのである。色々考慮した上、今年は偵察ということで中止に決定した。私は悔しかった。探検それ自体未知への探求を根底においていると思う。未知の分野には必ず危険は伴うものである。それ故我々は必死に練習をし危険率を最小限度に食い止めるように努力をして来たのである。それを何もしない他者が「暴挙」と決めつけ中止の圧力をかける事は言語道断である。探検における行動の全責任がその人自身に帰する限りにおいて、他者がその行動を束縛する権利はないのである。

二年目は一番苦しい時期であった。学内闘争に

おける探検部のあり方、組織と個人から始まり探検自体の問題まで数多く提起された。黒部に関しても色々な問題が内在していた。「黒部計画は単に先輩からの伝承であり、そこに我々の主体性が存在するのか」とか、「探検とボート」等議論された。

それらの問題を踏まえた上で、我々の本義はどのような状況の下でも活動することにあるという事で、黒部川計画を続行することに決定した。

黒部に関して総ての準備を整えいざ出発という時に集中豪雨に見舞れ、サポート路としての高天が原新道及び日電歩道がズタズタに破壊され、又川自体も大きな変化をもたらし、我々の計画は無残にも打ち砕かれた。これほど無念な事はなかった。怒りのぶつけようがない苛立しき、自然の少しの気紛れに対して何もできない人間の無力さに対する挫折感。私は何もかもいやになった。黒部などどうでもよかった。行動中の失敗なら何年かかっても成し遂げようとするだろうし、又、失敗の原因を追求し、それに応じた練習も出来るだろう。しかし我々の場合は違った。行動を起す前のアクシデントである。

私は苦しかったけれども諦める訳にはいかなかった。口幅つたい言い方かもしれないが、黒部をやらなければこれからの私自身その存在価値がなくなりそうな気がした。黒部をやり遂げて初めて私の第一歩が始まるような気がした。ここで諦めたら一生中途半端な人生を送らなければならない。私は当時「探検」の情熱以上に「私自身」の為に

黒部をやろうと決心した。

11月初旬に黒部の偵察に行った。8月の豪雨跡の状態を見に行き、来年の黒部が可能かどうかを確認するためである。黒四ダムの下にベースを設け内蔵助まで調べに行った時は、もう駄目かと思った。予想外に荒れていた。

翌日別山まで行ったが相変わらず荒れている。そこでビバークし、次の日に十字峡まで行くことにした。もしこの状態が続くのなら黒部を諦めようと心に決めた。今から新しいものを目指すのは苦しいかもしれないが、黒部の今までの苦勞を生かせば何か出来るだろうと心に言い聞かせた。

我々の執念が通じたのか十字峡までの道は昔とはは変らなかった。その先も同様だった。嬉しかった。その時初めて気がついた。白竜峡の美しい流れが我々のボートを呼んでいるのを……。

私にとって3年目にして黒部川を完結することが出来た。私自身精一杯行ったけれども、リーダーとしては色々複雑だったし、反省すべき点を数多く残した。

黒部川を他大学が狙っているのを知っていたので期間の決定に迷った。私の考えでは、黒部の魅力というものは未だ上、下完全航行がなされていない所に第一義的なものがあった。この3年間我々は黒部に関しては他の人々に絶対に負けない実力を養って来たと自負していたし、我々をおいて他に黒部を成功させることは出来ないと信じていた。もし誰かが先に行ってしまうと私は止めるつもりであった。だから誰かが先に行ったら無念の涙をのまねばならないし、失敗したら色々な問題が生じるだろう。探検とは一つの競争だから「我々の後にしてくれ。」という事は勿論いえない。時期を早めれば下ノ廊下は雪溪で埋ってとても下れる状態ではない。

私は迷ったけれど、ここまで来て中途半端な事

をしたくなかった。白竜峡が下れる状態になった時にアタックしようと決心した。これは別に誤りではなかった。

いよいよアタックの日が来た。上ノ廊下の出発点である立石からボートが出発する時、頭の中にはどんなことがあっても成功しなければいけないという考えで一杯だった。

上ノ廊下では途中帆布の底が破れるという思いもよらないアクシデントが起ったが、ボンドでつなぎ合わせる事によって窮地を脱することが出来た。黒四まで行けばサポート隊と合流出来るし何とかなるだろうと思い、わりと余裕があった。

しかし下ノ廊下では色々な教訓を得た。まず第一は、十字峡を少し下った所にある2.5m～3m程ある垂直な滝である。偵察の時からその存在は分っていたし、心中ひそかに下ってやろうと思っていた所であった。しかし実際滝のそばに来てみると予想以上に厳しかった。私は今までこのような大きな滝をボートで下った事がなかった。ボートに関しては的確な判断が出来ると自信を持っていたが、この滝を目前にして迷った。滝で転覆すれば確実に“死”が待っている。運がよくても全員は助からないだろう。

私には人の命を左右する権利はないのである。またそれほどの人格も出来てない。この場合、ボートをザイルで流せば絶対安全なのである。リーダーとしてこの隊が四面楚歌の状態なら私は命令も出来よう。私は皆の意見を聞いて、結局二人アタック、残りはサポートという形をとった。

私がここで言いたいのは、全員の意見を聞いてる時にも私の心は迷っていたということである。リーダーとしてまず第一に考えなければならないのは隊員の安全である。他の者がアタックしようとしてもそれが危険だと判断すれば押えるべきなのであるにもかかわらず、私は自分の下りたい欲

望を捨て切れなかった。この弱さが後々まで私を苦しめた。

私と水野でアタックした。滝に突込むまでは非常に緊張した。後方のザイルが離されボートは滝に入った。“うまく行った”と思った瞬間、いつのまにか水の中にいた。ボートは転覆したのだ。“もう駄目だ”と正直思った。しかし別に焦りはしなかった。水中から水面の泡が見えた時、これはひょっとして助かるのではないかと思ひ必死で上へ泳いだ。水面に顔が出た時水野の方を見た。彼はまだ出て来ない。死んでしまったのではないだろうかと咄嗟に思ったが、その心配も束の間、彼の白いヘルメットが見えて来た。2人供助かったのだ。最初から終わりまで時間にしてほんのわずかであるが、私は非常に長く感じた。

今でも思い出したらゾーとする。“もしあの時サポートしてなければ……”。

第二は半月沢の雪溪である。川にスーブリッジが掛っていることは前日の偵察で分っていた。その時一日の偵察日を持つかどうかを考えたが、私は雪溪の手前でボートを止めることが出来ると判断した。明日一日で勝負をつけたかった。結果は失敗であった。80 m の高さから川の流れを見ると、目前で見るのとでは大きな差異があり雪溪の手前でボートを止められず雪溪を見ることは出来なかった。仕方なしにワイヤー梯子をたらし川

から80 m 上の日電歩道まで登った。詳しいことは省略するが、一日の偵察をしなかった為に、二日間も損をしたばかりでなく非常に危険であった。

あの時一日偵察すべきであった。三年間も待っているがらずか一日を待てなかった。私自身の焦りが招いた結果である。あらゆる状況を判断して一日偵察したところで、何の支障もないのである。最後の詰にこそより慎重にしなければいけないと思いつつ失敗をしてしまった。“待つ事”の大切さを思い知らされた。

最後に黒部のアタックを通じて始終心の底で先輩に頼っていた。リーダーとして行くからには先輩を頼りにしてもよいけれども頼ってはいけなと思いながらも駄目であった。私の精神の弱さであろう。実際に色々相談するのは当然のことであるが精神的にはもっと厳しさが要求されるのではないだろうか。

黒部に関して色々な事があったが追い求めてよかった。これだけは胸を張って言える。しかし、それも過去のものになってしまった。長年の苦難も“成功”その瞬間に打ち消されるのである。そのあとには新しい苦難の道が待ちうけている。

“苦難は長く喜びは一瞬にして消える”

(O B)

コロラドに向けて

前 田 修
